

吠える

宮本百合子

青空文庫

雨が降って寒い夕暮など、私はわざと傘を右に傾け、その方は見ないようにして通るのだ。どういう人達が主人なのだろう。そしてまた何故、あの小舎を、彼処に置いておくのだろう。私は、坂を下りかけると、遠くから気をつけて行く。白いものがちらりと見えたり、かちやりと鎖の音がしでもすると、私は矢を禦ぐふせ楯のようにいそいで傘を右に低く傾ける。登って行く時なら反対の方へ——左へ傾ける。それで眼で見ることだけは免れるようなものだが、私は楽でない。彼処にあれが、ああやって生存する間私は完全に楽にはなり切れまい。——私は或る一匹の犬のことをいっているのだ。

然し、それより前、家のことを話そう。その犬の飼われている家は、小石川の二つの丘陵地帯を繋ぐ、幅広い坂の中途にある。坂の中途に建った家がよくそうである通り、家全体の地盤が坂より低い。二三段石の踏段を降りて、門から玄関までの敷石を渡ることになっている。細長い、檜の木の生えた、狭く薄暗い門先だ。そこに、犬小舎が置いてある。軒下ではない。門柱の直ぐ傍だ。何だか粘土質らしい、敷石はずれの地びたの上に、古びた木造の犬小舎がある。

私は、その門から男も女も、活々した姿を現したのを嘗て一瞥したことさえない。門扉が開き、まして近頃はアンテナさえ張つてあるのが見えるから、確に人はいるのだ。それにも拘らず、私

が通る時出会うのは人ではない。犬だ。いつも、犬だ。白い頭の上から墨汁の瓶をぶっかけられたように、黒斑くろぶちのある白犬だ。

斑犬を、私は一概に嫌いだというのではない。鷹揚で快活な斑もあるが、その犬のように、全体はつきりした白と黒とで穢よごれたようなのは、陰気だ。その上、まるで面長な色白い人間の婆さんのような表情を、この犬は持っているのだ。樫の木は、冬でも小暗い蔭を門になげている。家はがらんと人ひと気ない。そこに、鎖につながれ、この斑の婆さん風な犬が私を見ている。——おまけに、その犬は、世間普通な犬の吠え方を知らないのか忘れるかしている。吠える声を聞くといつも遠吠えだ。死人しびとの魂を動物の本能が感じて恐怖するという遠吠えだ。ワオーと、鼻にぬかして遠吠え

する。

天氣のいい、そして、或る私が最も神経的になることさえ起らない時なら、その斑犬を見るのも平気だ。困るのは或る一事の外天氣のわるい時、雨の降る日。この時こそ私にとって目かくし役をする傘がどんなに有難いかわからない。どんな主人が住んでいるのであろうというのはここのことだ。軒下へ犬小舎を置いてやらない主人は、雨が一日びしょびしょ降りつついても、小舎を雨ざらしの門傍に出したままだ。坂からの傾斜があるから、泥水はどしどし門内に流れ込む。粘土が泥^ぬ濘^{かるみ}になる。小舎の敷藁——若しあるとして——もぐちよぐちよであらう。斑の、いやに人間みたいな顔付の犬は、小舎の中にも居られず、さりとして鎖がある

から好きな雨やどりの場所を求めることも出来ない。苦しまぎれに、自分の小舎の屋根の上に登って四つ脚で突立っている。毛は絶えず雨に打たれる。食物の空瀬戸茶碗からがころがっている。檜の枯葉が背中にはりつく。人さえ通ると、ああこれは冷たい、居心地わるい、悲しい、犬でも悲しい。と訴えるように、人間じみた斑の顔を動かして吠える——遠吠えの短いのをする。鎖を鳴しつ、つ、危い屋根の上で脚を踏みかえ、ブルブルと佗しさあまる身震いをする。

だから、私はいやだというのだ。犬の心が傘一重でふせぎ切れるものか。私の足の裏まで雨水づかりで、やり切れなくなつたよ
うな心持がして来る。

主人はどういう人なのだろう。

もう一つの或ることというのは、私の二階から彼方の木立越しに見える小窓の奥に坐している人と、この斑犬との関係だ。私が、斑犬の遠吠えを気にするのは外でもない。此方で奇妙な不幸な境遇に置かれた犬が、冬の青空に向って遠吠えすると、きつと暫くして、あの小窓の奥の女の人も吠え出す。やはり遠吠えで、半獣的な、意味の分らない叫声を、喉の奥から心から送り出す……狂人なのだ、その女の人は。有名な精神病院の監禁室の一部が丁度此方向きになっているので、見まいとしても私の眼に、その鉄棒入りの小窓が写る。

空地があるから、一町ばかりある距離を躑こえて、斑犬の遠吠え

が小窓の中へ聞えるらしい。おや、と気づいて耳を澄していると、大抵一分たたないうち、微かな女の唸り声が伝つて来る。一度で犬はまたやめたことがない。二度、三度と吠える。一遍ごとに遠くの女の吠え声は高まつて来、遂には、はつきりウオーイ、ウオーイというのがわかる。そうすると、面倒なことに、斑犬が、何か異様な興奮をその半人半獣の声から感得するらしいのだ。彼は益々長く切なく声尻を引張つて遠鳴きする。彼方の狂人も、それに応えては、心一杯ウオーイと繰返す。この二重唱が起ると私はいつも、始めのうちは極めて渋い涙が、眼ではない、鼻柱の心のどこかに湧き溜つて来るように感じる。それを堪え、いつか氣を奪われて、人間らしい獣と、獣に近い人間の吠え声にききとれて

いると、妙なものではないか、私の理性迄がちつと変になる。あの二つの、切な吠え声だけに人生が^{コムプレッス}圧縮されてしまったように感じ、私も一緒に吠えだしたくなる。ウオーイと。

〔一九二六年七月〕

青空文庫情報

底本：「宮本百合子全集 第十七卷」新日本出版社

1981（昭和56）年3月20日初版発行

1986（昭和61）年3月20日第4刷発行

底本の親本：「宮本百合子全集 第十五卷」河出書房

1953（昭和28）年1月発行

初出：「新小説」

1926（大正15）年7月号

入力：柴田卓治

校正：磐余彦

2003年9月15日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.waozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

吠える

宮本百合子

2020年 7月13日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>